

第1回 総合計画審議会 議事要旨

■日 時 令和2年10月26日（月）9時30分～12時00分

■場 所 消防局庁舎4階災害対策本部室

■出席者 【委員】

岡本琳南委員、小川喜久雄委員、小原信治委員、門井秀孝委員、菊池匡文委員、菊地萌歌委員、北村明美委員、櫻井聡委員、島由紀子委員、鈴木立也委員、相馬希咲委員、高橋恭子委員、高見沢実委員、千葉理恵子委員、鳥澤一晃委員、馬場亮委員、牧瀬稔委員、宮田丈乃委員、村田範之委員、安井哲也委員、山本愛子委員、好村明理彩委員、若松滋俊委員、

（以上23名、50音順）

（欠席：宮崎美由紀委員）

【事務局】

上地市長、平澤経営企画部長、宮川都市戦略課長、太田主査、山中

■傍聴者 市議会議員8名

■議事内容

- 1 市長挨拶
- 2 辞令交付
- 3 委員長及び職務代理者の選出
- 4 諮問
- 5 委員自己紹介
- 6 事務局からの概要説明
- 7 分野別未来像について（福祉分野／子育て・教育分野）
- 8 その他

9時30分 開 会

1 市長挨拶

- ・総合計画審議会の委員にご就任いただきましたこと、ありがとうございます。
今、我々はパラダイムシフトともいうべき、非常に大きな時代のうねりの中にいると思っています。進歩が著しい技術革新に加えて、今回の感染症や、近年の大規模自然災害など、これまでの常識が通用せず、先を見通すことが非常に難しい時代となっています。このような時代だからこそ、私は、豊かさとは何か。人と人との繋がりとは何か。生きることは何か。ということが我々に突きつけられた課題ではないかと思っています。
- ・ご承知の通り、横須賀は人口減少や少子高齢化など非常に厳しい状況になっていきますが、横須賀は、他都市と比較しても、地域の絆が色あせることなく、色濃く残っていたり、三方を海に囲まれて、山海の恵みを身近に感じることができるなど、魅力は数限りなくあると思っています。これから皆様にご審議いただくものは、これらの魅力にさらに磨きをかけ、次世代に確実につなげていく、将来に向けた横須賀の未来像であります。このような不透明な時代だからこそ、市民の皆さんが横須賀の未来に希望と期待を持てるような、輝きを放つ未来像にしていきたいと、切に願っています。
- ・委員の皆様においては、専門的な知見や市民生活に身近な立場など、様々な観点から、建設的な議論を交えていただきたいと思っています。足かけ、2年にはありませんが、ぜひ力を貸していただきますようお願い申し上げます。
- ・時代のフェーズは刻々と変化しておりまして、明日どうなるかもわからないような時代だからこそ、皆様のお力をお借りして、横須賀を、日本の、いや世界の中の横須賀にしたいと思っておりますので、ぜひお力いただきますようお願い申し上げます。簡単でございますが、ごあいさつとさせていただきます。どうぞよろしく願いいたします。

2 辞令交付

席上にて辞令交付を行った。

3 委員長及び職務代理者の選出

総合計画審議会条例第3条第1項にもとづき、委員の互選により高見沢実委員が委員長に選任された。また、高見沢委員長が高橋恭子委員を委員長職務代理者に指名した。

4 諮問

口頭にて諮問を行った。

5 委員自己紹介

各委員の自己紹介の後、事務局の紹介も行った。

6 事務局からの概要説明

事務局から、次期基本構想・基本計画策定の考え方、スケジュール、横須賀市の現状などについて、説明を行った。

【質疑応答】

(高見沢委員長)

- ・この10分野というは、もう決まったものなのか、また、先ほどITは全体を貫く重要な要素であるという議論もあったが、そのようなものが出てきたときにどうするのか。与えられたものの通り議論すると、窮屈で自由に議論できない気がするが、どうか。

(事務局)

- ・10分野は、決まったものではなく、あくまでもたたき台なので、こういう分野も必要だとか、そういった意見があれば、追加するとか見直すということは考えられるので、ありきで考えなくて結構。

(高見沢委員長)

- ・市長もこのような時代だから、のびのびとやってほしいということだったと思うので、ぜひご自由に、議論していただきたい。
- ・市の未来像も、3回目に議論するように設定されていて、このたたき台では、18個挙げられているが、もう少し、未来はこういうものじゃないかという豊かな表現ができる気もする。それは、いずれそのような議論をするということによろしいか。

(事務局)

- ・ご指摘の通り。これもこの中から選んでくれという話ではなくて、あくまで例示で、皆様からご意見をいただきたい。また、それ以外にも、小中学生や高校生といった若い方々に、ご意見いただいている。そうしたものも含めて、市の未来像というものを描いていきたいと思っているので、これが決まっているものではないということをご承知おきいただきたい。

7 分野別未来像について（福祉分野／子育て・教育分野）

（1）福祉分野

（小原委員）

- ・「福祉」という言葉が本来の正しい意味で伝わるのかという疑問がある。福祉といえば行政目線では市民全員が対象だが、市民感覚では、障害を持った方や高齢者の方といった支援を必要とする方にむけたものに思える。福祉の本当の言葉の意味は、幸せとか、幸福論。たたき台に書かれている文章は全員に当てはまることだが、福祉というジャンル分けがされている時点で、支援を必要としない人は、自分とは関係ないことなのではないかと受け取ってしまう可能性もあるのではないか。そういう意味でもカテゴリーが「福祉」という言葉でいいのかどうか。幸福論とか、幸せとか、全員に当てはまる。全員が自分事として捉えられる言葉でくくったほうが良いのではないか。

（高橋委員）

- ・おっしゃる通りで福祉の概念は非常に広い。誰もが福祉の担い手にもなるし、受け手にもなる。みんなの幸せの追求というのが広い意味での福祉の概念。誰もが、福祉を自分ごととして考えなければいけない。ただ、みんなが自分ごととして考えられるような表現は必要かもしれないが、とても広い概念なので、すべてを覆ってしまうような、幸福の追求というような表現は難しいかもしれない。
- ・むしろ、福祉というのは、障がい者、高齢者だけではなくて全員ということ、皆さんに認識していただく意味で、福祉という分野にして、中身をそういうものではないということ、分かる形で示すということもあると思う。
- ・分野が 10 に分かれているところの、健康・医療は、福祉と非常に密接で、地域包括ケアというような言葉があり、誰もが包括的な支援体制の中に、健康も医療、福祉も、受け手にも、支え手にもなるという概念が、今すぐ持たれている。分野についても、関連するところは一緒に意見を出していけたら良いのではないか。

（高見沢委員長）

- ・今の段階では、あまり言葉にこだわらず、こんなふうにしたいという意見を出し合って、まとめていく段階で、言葉を与えたり、カテゴリーを再構築したりできたらと思う。今日の場合は、どんな感じのことを盛り込むと良いかということを出していただくのがいいかと思う。

（櫻井委員）

- ・高齢者や福祉を必要とする人のライフスタイルが、今後、変わってくると思う。団塊ジュニアがどんどんリタイアしていくと、現役世代 1.5 人に 1 人の高齢者、もしくは福祉を必要とする人となる。そうすると、IT化やロボット化は、絶対に避けては通れない。例えば、遠隔問診などが必要になってくる。今まで、福祉を必要とされていた所に、デイケアで行ったりするのではなく、個々で家において

リモートで様々な福祉を受けるといった形になってくる。幸福論や幸せの感覚も少し変わってくるということも視野に入れて 2030 年の福祉の新しい形というのを模索しなければならない。

(高見沢委員長)

- ・文章を見ると、「新しい福祉を追求する」に、「テクノロジーを活用した」と書いてあるが、それについてどういうふうに関心を感じるかとは、書いていないので、例えば家にいながら、遠隔診療や、自分の活動範囲に応じた福祉が受けられる生活ができるのか、そういうイメージができるかと市民にしっくりくる。

(村田委員)

- ・私も小原委員と同様の疑問を持った。たたき台は弱者救済的な狭義の意味の福祉ではなく、広い意味の福祉が書かれている。これが 1 番目に書かれてるということに意味があるんだろうと思った。横須賀って、一人ひとりの幸せのために、お互いがお手伝いをし合うような社会にしていきたいという、総論的なことが初めに書いてあると考えた。

(菊池匡文委員)

- ・1 番目の福祉、2 番目の子育て・教育は、専門家の方々が日々支えていただいでることで、横須賀市としても、他都市に比べて、政策としてよくやっていると思う。ただ、この 2 つの分野は、都市政策のプラットフォーム的なところがあるので、定住だとかそういったものにも繋がってくるテーマではないか。その中で、今、転出超過になっているのが、20 代から 40 代の方で、いわゆるファミリー層。今、住んでる方が、どのようにその政策や実効性に対して、感じているのかということ、分析していかないと、新しいものもできないし、修正することもできない。単に、時代背景に合わせて、新しいものを作ることはできるが、現状に根差したのではないと、今、人口減少に繋がっていることがこのテーマであるとする、足元を整理していかないといけないと思う。今、横須賀市として、分析をされてるのかどうかお聞きしたい。

(事務局)

- ・分析という意味では、市の方では福祉計画をつくりながら進めている。ただ、福祉のアンケートでは、若い方々に聞いているということはないと思うので、そこについては、市民の意見ということで、こちらのアンケートで、今、若い方々がどう思うかというふうに聞いているのかということも聞いていけると思う。

(鈴木委員)

- ・福祉と考えると、施設。高齢者施設。児童施設ということも 1 番初めに思うが、支え合いの気持ちを持つということが、横須賀でも出てきた。支え合い協議会というのを作っている。
- ・私は、福祉は適度なお節介だと思う。例えば先日、私がスーパーで車椅子に乗っ

ている方に、「大丈夫ですか」とお声かけをした。その後、その方の奥さんが、こちらに来たので余計な事をしたのかと思ったが、「ありがとうございます。」と言われ、お互い良い気持ちになった。福祉のはじめはそのようなもので、お節介なことをやっていく、人が困ってることに對して、何か手を貸すことができるのではないか。そういうことじゃないか思っている。

(好村委員)

- ・皆さんが話していたことを聞いて、いろいろと納得しているところもあるが、個人の意見として、制度を利用する抵抗感を持つてる方も結構おられるんじゃないかと思う。皆さんに、その制度とかを、使いやすく感じてもらうためのガイドブック的な分かりやすい資料を配ることもいいと思う。

(北村委員)

- ・高齢福祉の分野では、問題は働き手をどう確保するかということが一番。学生さんたちと話をしたり、中学生とディスカッションしたりという場があるので、先ほども教育に興味があるというのは、そういう時から特別じゃない、みんながそういう担い手であって、自分も福祉の中の一員。支えられる側でもあるという意識づくりが、一番大事だと思う。資料の中、意識のバリアを打ち破るという言葉があるのが、私はすごくいいなと思った。皆さんがおっしゃっていたように福祉って何か特別なような思いを抱きがちだが、隣の人に声をかけるとか、隣の人から声をかけられてほっとしたみたいな、そういうところからすべてが始まると思う。
- ・高齢者は誰もがなるところで、それ以外は病気や障害があるが、自分がいつかこう支えられるときに、どうやって支えてもらいたいかっていうようなことを考えられるような、そういうような方向性を示せばよい。特別じゃなくていつもあるということ、自分の価値を見いだすとか、そのような形がいいと思う。
- ・シンポジウムでは、高齢者の方、民生委員さんの方が、お話を聞きに来てくれた。やはりどこかでやりにくさとか、特別で、ちょっと壁が高いと、感じられる方が多かったかと思う。横須賀に住んでいて自然に福祉が特別じゃなくなる流れになるという環境が一番良い。

(鈴木委員)

- ・横須賀は共同募金が神奈川県でトップ。横須賀市民はすごく人情がある。だから、共同募金もいいんだろうという話をする人がいる。この人情があることで、福祉の方も、神奈川県では横須賀はすばらしいという話が出ており、1つは民生委員のほかに推進員制度があり、推進員が地域で3、4人、自分の地域のことをいろいろとやっている。横須賀にはそういうところもある。

(牧瀬委員)

- ・福祉を横須賀市はどのように定義しているのかということだと思う。その定義が、

皆さんバラバラなので、議論がほんわかしている。福祉の定義が明確にならないと、いわゆる方向性は分かってこないし、微妙なものになってしまうという感じがする。この後の、教育とか子育ては、定義が大体一緒だと思うが、福祉は、皆さんいろんなイメージを持っていて、それぞれボールを投げあっている状態なので、その定義が決まらない限りは、2030年までの目標が決まらないと思う。

(事務局)

- ・そういう意味では、このタイトルに書いてある、すべての人が自分らしく幸せに生きられるということを、定義に捉えていて、ここに収斂されると思っている。全方位的というか、例えば高齢者だけではないということは、認識している。このタイトルを元にして考えて頂ければと思う。

(小原委員)

- ・2030年は最新のデジタル機器がさらに進んでいて、デジタル機器を使えない人は、デジタルデバインドで取り残されていくということになると思う。高齢の方も最新のデジタル機器を使いこなせるだけで、家にいながら買い物ができたり、オンライン診療を受けられたり、人と繋がることができたりと、随分、支援の手が離れることもあると思う。全員が最新のデジタル機器を最低限使いこなせるように自立支援していくということが入っているべきだと思う。

(高橋委員)

- ・IT機器を使うというのは、介護の現場でも入ってきている。それから一人ひとりが、デジタル機器を使いこなせるということは、情報を得るという意味でも大事だと思う。それに関連して、「社会に対して新しい産業や価値を提案する福祉」という表現があるが、これが分かりにくく、どういうことを指しているのか説明してほしい。

(事務局)

- ・社会に対して新しい産業というのは、まさにIT、IoTを使った、新たな福祉をベースとした産業という意味で示している。価値というのも、福祉を通じて、社会に新たな付加価値を提供するというところで、この文言を使っている。

(高橋委員)

- ・ソーシャルビジネスとかそういうものを指しているわけではないのか。そのあたりは、今、非常に必要になってきているところだと思う。

(事務局)

- ・そういったものも含めて、全体的な産業という言葉でくくっている。

(高橋委員)

- ・今後、ソーシャルビジネスやコミュニティビジネスといったところの視点も持っていたらいいと思う。実際、起業をしている例も多い。

(千葉委員)

- ・皆様が幸せを感じる福祉というのは、当たり前のことだと思うが、その指標とは何なのか。市として、この未来像を作るときに、思いや気持ち、一人ひとりの価値感、幸福感はそれぞれ違う。それを、こういうふうに表示して、支え合うということも大事だが、これからの未来の子たちへは、一番はマインド教育というものと連携してくるとすごく感じた。
- ・未来構想を作るにあたって、この30年のITの進化はすさまじい。もっともつとすごいスピードで進化し、人の代わりになる、AI、ロボット、ハードの整備がすごい速さできているので、それを受け入れられるような人たちの育成に視点を向けるということも福祉の中では重要。

(高橋委員)

- ・やはり福祉という分野なので、とても大切にしないといけないのが、人権尊重、多様化の尊重、差別、偏見をなくすといったことが福祉の目指しているところ。福祉の概念は非常に広く、わかりづらい、漠然としてる、定義が必要なんじゃないかというご意見もあった。対象が広く、誰でもということだけれども、社会から孤立しない、包摂とか、そういうような大切なキーワードが落ちないようにしながら、まとめていっていただくと良いと思う。

(鳥澤委員)

- ・防災の観点では、ここで議論されたようなことは、少し遅れているところがあり、福祉避難所とか、ある意味、健常者の方と身障者の方を分けるという概念がある。ここで、議論されてることはもっと進んでいるので、あるべき姿のほうに進んでいると思う。
- ・福祉というのは、まちづくりの観点、また、ものづくりの観点からも、ユニバーサルデザイン、バリアフリーとか、従来から使われてきてる言葉があり、先ほど指標という話がありましたが、どういう指標でやってきたかということも含めて考えていくと、これからのあり方というのが、少し具体的にできると思う。

(宮田委員)

- ・家族を中心に、お隣、地域という、人と人との繋がりを大切に、その中から文化が生まれてくるんじゃないかと思う。お隣同士とか、コミュニティネットワーク、だんだん地域に広がって行って、年齢相応に、学校で学べなかったことを、家庭に来て学ぶ。近所で学ぶというような横須賀の町になっていくと、子どもたちが楽しく、元気に、生き生きと、創造性とか、生きる力が育っていくんじゃないかと思う。

(島委員)

- ・私が感じたことは、横須賀市が「すべての人が自分らしく」ということを、第1の基本だと言っている中では、福祉を受ける対象の人たちのための施策ではなく、全員が福祉の対象であるという、啓蒙的なものを、未来像の中に入れていただき

たい。学生さんのアンケートという話もあるので、ぜひその層の人たちに、福祉の大切さ、関わり方というのを、記していくべきだと思う。次の子育てもそうだが、その対象者を限られるような内容だともったいないと思う。

(小川委員)

- ・横須賀市民の所得がどういうふうになってるかということ世代別などで、データとしてあれば出していただきたい。例えば、地域の中で子育てをする場合、今は、子ども会に入らないというのが多い。子ども会に入らない理由の一つは、お母さんたちが役員をやるのが嫌だから。その理由は、みんなパートに行っている。そういう現実がある。それは、地域のコミュニティが崩れている一つの部分。だから、今、横須賀の中で、生活基盤がどういうふうになってるかということ資料として出していただくと、論議の視点にもなると思う。

今、町内会の役員もやらないと、自分の生活でいっぱいだとか、自分の趣味に生きていきたいとか。そういうところもあるが、一方で生活的な基盤がそこまで回らないということが必ずある。そこをどうやっていくかっていうことも、福祉や子育ての論議をする場合には、重要な基盤になっていくんじゃないかと思う。その辺りを論議の視点として分析した上で、進めていくべき。

【意見記入シート】から

- ・市民が「福祉」を特別ととらえない記載が良いと思う。「住みやすい」、「住み続ける」為に不便なことに視点をあててはいかがか。
- ・対象者が全市民であること、相互に支え合うことを認識してもらえる様な、施策が必要だと思う。
- ・一人ひとりが自分らしく、自分の“できること”をいかせる社会に。生涯、死ぬまで一人ひとり幸せに。
- ・あるべき姿を分野だけでなく、更に大きなビジョンと併行して進めることが重要
- ・幸福を考えつつ30年後のロボテック IOT が進んでいく姿を見つけない。
- ・困った時に孤立させない、助けを求める手段を用意するのが重要。
- ・定年前後の子育てが終わった世代の生きがい作りが重要（コミュニティと共通）。
- ・障がいや生活困窮、児童福祉等も重点的に捉えたい。
- ・社会から取り残されていると感じる層を簡単にジャンル分けするのは難しい。より当事者の視点を反映できるような仕組みづくりが必要。
- ・オンラインに頼りすぎてしまうと、社会的孤立につながってしまう可能性も視野に含めなければならない。

(2) 子育て・教育分野

(小原委員)

- ・一児の父親という立場から見ても、子育てや教育という言葉自体にどこか前時代的な、子どもへの一方的な押し付けのような違和感がある。たたき台に書かれている「育つことと育てること」といった、人が共に成長するみたいなことには、すごく共感するので、子育てや教育という言葉ではなく、多様な個を育てると書いて「個育て」とか、共に育つと書いて「共育」のように言葉の概念自体も時代に合ったものに変えた方が、市民の方にはより届きやすいのではないかと。今までの、子育て、教育という言葉を使っている時点で、あまり変わっていない気がするのですが、そもそもの言葉自体を変えられたらと思う。

(櫻井委員)

- ・横須賀市で学力の低下が非常に問題になっている。今、ワーケーションやリモートワークで三浦半島に住まれる方が増えてくる中で、やはり見過ごせない部分だと思う。SNSで、地域の学力を比べる方も非常に多い。PTAでも、学力の低下に関しては要望書や相談をいただいている。この学力の問題を考えていかなくてはいけない。
- ・学習のIT化も、子どもたちはスマホネイティブの世代で、端末をいじることに抵抗感がない。今回の在宅学習、リモート学習について、全市の保護者にPTA協議会でアンケートを出したところ、97%のご家庭で、家で学習できる環境があるとの答えだった。何らかの形でインターネットに繋がるので、ITを通しての学習、新しい視点での学習、教育、学力の向上を図っていく必要があると思う。むしろ、子どもたちではなく、先生方がITの教育、ITを通じた学習に関して非常に抵抗感があり、難しいととらえている。
- ・今27,000人ほど、公立の小中学生がいるが、毎年5%減っている。なので、2030年にはだいたい16,000人ぐらいになると考えられるので、子どもへの手厚い教育、学力の向上、こういったところを支えていく、そういう横須賀であって欲しい。

(千葉委員)

- ・学力の低下は、近年なのか、長年に渡ってなのか。

(櫻井委員)

- ・私が横須賀で子育てを始めたのが12年ぐらい前で、その時点で話はあった。7年前には、市教育委員会の方からも話は出て、県レベルで考えるとかなり下というのは確か。元々あったのではないけれども、なだらかに下降してるのではないかと思う。

(千葉委員)

- ・その原因は。

(櫻井委員)

- ・色々なことがあると思うが、個人的な考えでは、教員不足が著しいということ。先生の素質の問題ではなく、数の問題。もう一つ大きい理由として、子どもたちが、少し競争心に欠ける部分があるのかなと思う。これはアンケートやデータでも出ている。例えば、横須賀市から横浜市の学校に行った時に、学力で苦勞するという話は、PTAでよくあるが、子どもたちの競争心ということでは半島の中で、ある程度査定をしてしまうところが要因だと思う。

(千葉委員)

- ・もちろん、学力だけが人生ではない。横須賀の場合は、横須賀商工会議所がキャリア教育にいち早く取り組んでいて、学力も自分の人生も一緒に考えようという教育をしている。私がキャリアカウンセラーとしてお手伝いしてきた中で、そういう色をもっと横須賀が出したらいいのではないかな。もちろん学力も大事だが、人となりといったこととのバランスも大事な教育だと思う。人に会ったら挨拶ができるなど基本の教育が横須賀市の基盤であって欲しい。弊社の採用試験の最終面接は私が行うが、家庭教育で受けなくてはいけない教育を受けてない、ただ優秀な大学には入っていて学力は十分あるという人材がここ数年、すごく目につく。実際に働いてみると、偏差値が高くない大学でも、しっかりと人としての教育を受けた人の方が会社に貢献していると思っている。そういう傾向にあるということも含めて、バランス良く教育できるようなまちづくりをしていただきたいと思う。

(櫻井委員)

- ・私もキャリア教育で学校に行き、子どもたちと話す機会がある。子どもたちの傾向として、答えが先に分かっているというのがある。例えば、インターネットでの仕事で、「インターネットを通しているけど、その画面の向こうにいるお客様との付き合い方、関わり方が大事なんだよ」という話をすると、教科書に書いてある答えを書いてくる。「大切なのはお客様の笑顔」。そういう型にはまる答え方をしてくる子どもが非常に多い。これは、ネットやスマホの影響が大きいと思うが、解答が先に分かっている子どもたちは、模範解答があつて自分の個性がない。やはり地域力、地域の人への教えが大事だと思っていて、地域力を生かした教育、様々な分野のエキスパートの方がたくさんいらっしゃるのだから、そういった方々から子どもたちに教育するのも、学力だけではなくて大事だと思う。

(千葉委員)

- ・横須賀はベースのまちということをもっと教育に入れたらいいなというのを子育てしている中で思った。子どもが小さい頃、ベースの中で英語教育を受けたり、英語を学ぶだけではなくて、多文化の色々な価値観を学ぶというすごくいい影響があつたので、そういうところを横須賀としてもっと力を入れたらいいんじゃないかな

いかと思う。

(山本委員)

- ・アートという模範解答がない分野から。今、田浦小学校の先生たちと総合学習で何かアーティスト村のアーティストと一緒に、学習カリキュラムを組めないかという話があり、森の中とか、谷戸の自然環境の中のを素材として作品を作ったり、思考や視点を変えていくという授業ができないかと話している。
- ・共に育つと書いて「共育」というのにすごく共感していて、ワークショップをしている中で、私を先生というふうと呼ぶ地域の方がいらっしゃるが、それに違和感があり、むしろ、引っ越してきたばかりで、教わっているというイメージで、何かを教える、教わるという枠組みを超えた、共に育つという場を、総合学習とかで、アーティストに限らず、地域で活躍している方とか、住民の方と作れたらいいなというふうに思う。

(菊池匡文委員)

- ・私どもの商工会議所で、キャリア教育を10年以上やっているが、中学校の生徒さんたちが横須賀の産業というのを身近に感じていない部分があり、産業界が、義務教育段階から入り込んでいくということで始めた、「中学生自分再発見プロジェクト」というのがある。学校現場に入って、子どもたちと横須賀で働くこととか、夢とかそういったものを一緒にディスカッションして感じることもある。
- ・「学校教育において育成するのはもちろんのこと、学校・家庭・地域が一体となって」という表現があるが、この表現はもう何年も前から、教育基本計画でも、地域の福祉に関する計画でも必ず出てくる言葉。この部分が具体的にどういう形になるのかというと、いまだかつて具現化されたことがないというのが私の感想。福祉の場面でもあったが、子ども会に入る人が少なくなった。要するに関わりがどんどん希薄になっていることが前提になると、これから先、この学校・家庭・地域が一体となるというキーワードが一番重要になってくるんじゃないかと思う。ここをもっと噛み砕いて、テーマの中に具体的に入れ込むということが、実効性あるものになるのかなと感じる。
- ・横須賀らしさというのが、このページの中に一つもないと感じたので、もっとそういう横須賀らしさをもって、子どもたちをどう育てていくかとか、一緒に学んでいくかというところを出した方が、特徴あるビジョンになっていくのかなという印象を受けた。

(村田委員)

- ・全体の底上げというのはとても大事なことだが、横須賀らしさという点では、突き抜けた才能を伸ばしていく。いろんな才能を持ったお子さんがいる。日本や世界のトップクラスにいるのが横須賀出身というのが、10年後、20年後に出てくると、横須賀の発展に繋がっていくのかなと思う。

(菊地萌歌委員)

- ・私も、英語教育を普及していけたらと思う。私自身2歳半の頃から、ベースに住んでいる先生に英会話を習っていて、小学生の頃は横須賀市が主催していたベースの方との交流会、あと、中学生、高校生の頃には横須賀市が主催していたイングリッシュキャンプに参加した。しかし、そのような企画をどのくらいの方が知っているか。毎回、決まったメンバーが集まってしまう場になっていて、他にも知っていたら参加する人がいるんじゃないかと感じていて、私が高校1年生のときに務めさせていただいた姉妹都市交換学生も、4都市あって毎年8人が参加できる企画だが、応募している人も少ないし、その知名度をどう上げるか、横須賀市のホームページとか、それだけじゃ足りないと思っていて、もっとみんなでシェアできるような政策、方法を考えていきたいなと思う。

(岡本委員)

- ・子どもがすごく受け身の存在として、とらえられてるんじゃないかと感じている。先ほど育てられる側と育てる側という話もあったが、子どもって一概に育てられるだけの存在ではないと思う。むしろ、子どもが成長していく時は、その主体であって当事者であるというふうと思う。なので、子どもが育っていく過程で、当事者としての視点を取り入れていただきたいと思う。
- ・学力の低下に関し、そもそも学力とは、机上での学習能力という側面が大きいのかなとお話を聞いて感じていたが、一方で、今、非認知能力と言われるようなものが、もっと必要になってくるだろうと思う。そこで、横須賀の魅力として感じているのが自然にあふれていること。昨日、家族で天神島に行き、すごく綺麗だなと思って、あんなに綺麗な海を近くで見れる街ってないだろうと思う。それから、ベースがあるということで多文化に触れる機会も多い。そういう魅力を発揮し、子どもたちが積極的に関わっていけるような機会を提供できれば良い。私自身は横浜市の中高に通っていたので、横浜市のプログラムに参加する方が多かったが、自然に触れるとか、実際に外国の方と関わるというような機会は横須賀の方がより魅力的と感じていたので、そのあたりをもっと、横須賀の特色として出していかたらいいんじゃないかと思う。

(島委員)

- ・私も20歳になる息子がいる。私はサラリーマンみたいな仕事をしていたので、保育園にフルタイム、学童保育も6年生まで行って、本当に人の手を借りないと、ここまで育たなかったという経験がある。毎日、学童保育、保育園に行って、お迎えはおばあちゃん、子どもとは朝、夜ちょっと顔を見せるぐらい。やはり、学校・家庭・地域、こういった方々の協力、また行政の制度が充実していれば、子どもは育つんじゃないかと実感した。横須賀にはいろんな魅力がある。それをどう家庭のお子さんにつなげていくかという施策があったらいいんじゃないかと

思う。

(宮田委員)

- ・横須賀って自然がとても豊かで、自然を生かした体験学習、豊かな感性を育むということに視点を置くと、家族でそろって外に出るという機会がない。そうした中で、横須賀には、公園施設がいくつかあるが、外に出て親子で思いっきり遊びができる場所って数えるほどしかない。市内の身近なところで、そういう体験ができる場所があつて欲しいと思う。そうした中で、人と触れ合う、挨拶をすることを身につけたり、遊びを通して人の話が聞ける力とか、自分の考えたことを人に伝えるとか、そういう基本的な力が生まれるのではないか。これは外の活動、アウトドアだけではないが、身近な中でも、挨拶などができることって素晴らしい。それが人と人を身近につなげる基本だと思う。そうした場づくりがあつて欲しい。

(門井委員)

- ・2030年に達成したいということだが、その達成できたかどうかの評価や検証というのをどのようにお考えなのかと思ひ、質問したい。

(事務局)

- ・計画の評価というのは、大事なところだと思うが、こうした未来像、未来の姿に対してどう評価をしていけばいいのか、例えば、計画書に指標を記すのかということについても、これから考えていきたいと思っている。ただ、定量的な指標を記すということは、なかなか難しいのかなと思っているので、指標に関してもこれから検討していきたいと思う。

(門井委員)

- ・私の個人的な意見だが、なるべく定量的な指標で見れた方が、非常に分かりやすいと思うので、その辺りご検討いただけると幸いだ。

(牧瀬委員)

- ・数値化はしたほうが良いと思う。達成できなくても良いと思う。数値化した方が、達成であるとか評価できるので、数値化しなければ評価できないので、数値を用意して、できなかったらできなかった、できたら、よかったという話であると思うので、何かしら数値をとられたら良いと思う。

(高見沢委員長)

- ・今日は、たくさん意見をいただいた。バックキャストでやるわけだから、今までの行政運営の目線で書くというよりも、こうあるべき姿とか目指したい姿が書かれていて、技術的にはその中から行政がどう施策ができるか、或いは主体が本当にいるかどうか、それを実際にやるためにはどういう施策が必要とか、そういう課題がどんどん出てくると思う。ある種、チャレンジということだと思ひるので、出た意見をうまく統合とか、包括できるような内容にレベルア

ップしていければと思う。

(事務局)

- ・数量と評価の点だが、今、ご議論いただいている基本構想については、あるべき姿ということでご議論いただいているわけで、この部分を数値化するというのは非常に困難だと思う。冒頭に説明した具体的な施策を定めた実施計画を来年度作っていくので、こちらの方にその定量的な評価というのはゆだねさせていただきたいと思う。このあるべき姿が、2030年にできたかどうかということについては、これは様々な視点での評価というものが、個人個人、或いは委員によって違うと思うので、こういうフリーに議論をいただく場面の中で、ある程度感覚的になるかもしれないが、指標はお出しするが、できた点、まだ足りない点、ここは何かうまくいってるんじゃないかという評価を皆様から、ご議論いただくという場を別途つくりたいと思う。

【意見記入シート】から

- ・すべての分野の交流ができると良いと思い「共育」が実現できる。市民へのアピール方法が重要と考える。
- ・子育て世代は仕事も忙しく、経済的にも厳しい世代。情報や機会を簡単に、数多く提供する事が大切だと思う。子ども、親、教師だけが当事者でなく、市民全体が子育て、教育に関わる様な仕組み、告知が必要だと思う。
- ・社会、地域全体で子どもを育てていく。子どもと一緒に過ごす時間が大切だという共通認識を持つ。
- ・今後、共働き家庭も増えてくるので、地域全体で子どもを大切にすることを。地域と育つ。
- ・学童施設等を通じて地域の様々な世代の方との交流。地域から学ぶ。
- ・横須賀らしさを教育に与えるに当たり、ビッグデータのアプリを使った市内中高生向けの授業を運営している。そのような形での未来像を作っていければ良いと思う。
- ・子どもの多様性をよく見て、子どもが選べる選択肢を増やす。
- ・不登校の子どもの進路の選択肢は周辺の市町とも相互に活用することが考えられる。
- ・共働き家庭における子育ては難しいところも多々あると思う。地域の方に子どもを預けるという試みを提案したい。地域の方（リタイアした方など）にまかせることができるとなれば、市外から移り住む方も増えると考ええる。
- ・今、国や県でも進んでいる事案ではあるが、インクルーシブ教育の導入を提案したい。今なら、先がけになるし、早期に健常者と障がい者が関わることで、福祉の精神も高まることと思う。
- ・国際教育について、ベースの活用（関わりあい）。今ある企画等も知名度が低い（どうあげるか、方法）。
- ・地域の小中学校の総合学習と住民が長期的に連携できる仕組みがあると良いのではないか。例えば、間に行政や民間が介入することで解決できないかと感じている。

8 その他

(事務局)

- ・次回の会議開催についてのお知らせ。次回は11月16日(月)9時30分から12時。場所は、本日と同じここ、災害対策本部室を予定している。なお、開催案内及び関係資料については事前に送付させていただく。

(鈴木委員)

- ・色々会議に出ているが、このように皆さんの発言が多い会議は初めて。横須賀は、これから福祉に対しては一生懸命やっていくんじゃないかと思う。これからも皆さんと一緒に話をしてやっていきたいと思う。

12時00分 閉会

(以上)